

北桐
HOKUTOH

2024

63



岩手大学教育学部同窓会

目 次

表紙絵 宮沢賢治読書感想画より「狼からのプレゼント」
岩手大学教育学部附属小学校 6年 藤原 泉

巻頭言

交流を深めて 北桐会 会長 藁 谷 収…… 1

特 集 「令和で大切にしたい体験を通した学び～生活科・総合的な学習の充実～」

『いかす』『わかる』をてんかいする
～未来をつむぐ人づくりを目指す生活科・総合的な学習の授業～ 君 塚 裕 子…… 2
生活科からの「とことん探究」で、「未来をつむぐ人づくり」を 金 野 浩 二…… 3
他者と関わり、考えと関わる総合的な学習の時間 矢 澤 慎…… 4
生徒が主体的に探究する職場体験活動 田 村 敬 済…… 5

桐の葉物語

今のわたしがあるのは・・・ 浅 沼 夏 希…… 6
Adventure 大 瀧 航…… 7
大学時代を振り返って 北 村 かおり…… 8
「教育実習」の思い出 川 村 憲 弘…… 9

キャンパス便り

大学時代を振り返って 千 葉 大 暉……10
「あたりまえ」に感謝して 佐々木 星乃花……10
教育実習での“経験”と“出会い” 佐 藤 桃 華……11
幸せと感謝 竹 村 天……11

思い出 一退官される先生方から一

過ぎ去った時間の豊かさに感謝して 今 野 日出晴……12
岩手大学で学んだこと 吉 井 洋 二……13
ホヤから広がった私の世界 梶 原 昌 五……14
Lost in London, Found in Morioka, and the river flows … 境 野 直 樹……15
変わる学校教育 改革を後輩に託す 立 花 正 男……16

事務局だより

教育学部同窓会「北桐会」創立70周年記念事業について/会務報告/連絡とお願い …17
令和4年度会計報告……………18
令和5年度役員……………19
編集後記……………20

巻頭言



交流を深めて

北桐会 会長

藁谷 収

会員の皆様、日頃より同窓会の運営に多大なご協力を賜り、感謝申し上げます。

現在の教育学部や社会状況を鑑みると、同窓会はより一層重要な存在となっています。新たな時代において、対面できる機会が制約された経験を経て、メールやオンラインミーティングを活用した交流が一段と活発になされています。これにより、地理的な制約を超えて広範な同窓生の皆様とのつながりを深め、情報交換や連携をより確固たるものにしていきたいと考えております。

同窓会は単なる交流の場だけでなく、母校や地域社会への貢献も期待されています。特に、現代社会が大きな変革を遂げつつある中で、同窓生としての経験や知識を活かし、地域社会に対するサポートや貢献が一段と求められています。また、若手同窓生（準会員）へのキャリア支援や助言も今後ますます重要な役割となるでしょう。

教育学部は大きな変革を遂げ、より効果的な教員養成に焦点を当てた教育体制を確立しています。現在、社会においては教員不足が深刻な問題となっており、その声に応えつつ、質の高い教育が求められています。新しい教育計画は、社会の要請に応えるために慎重かつ緻密に策定されました。ただし、計画が必ずしも順調に進むわけではなく、予測できない課題に対処する必要があります。このような状況において、過去の学芸学部や新課程の存在は非常に重要な役割を果たしてきました。

同時に、同窓会活動も学部の発展において不可欠な要素となっています。同窓会は、卒業生同士の交流や情報共有の場として、教育の最前線で活躍する教員たちにとって有益なものです。これにより、実践の場での経験やノウハウを共有し、より効果的な教育手法を模索することができます。

同窓会はまた、教育学部の卒業生がさまざまな分野で活躍している様子を垣間見る機会でもあります。これにより、学生たちは将来への展望を広げ、自身のキャリアに役立つ新たなアイデアやネットワークを得ることができます。同窓会と教育改革が連携し、卒業生と学部との結びつきを強化することで、より良い教育環境の構築が期待されます。

同窓生の皆様におかれましては、これまで以上に同窓会の活動に関心を寄せていただき、様々な機会を通じて積極的に参画していただければと思います。新しい形での交流や協力が、同窓会の更なる発展と社会への有意義な貢献に繋がることでしょう。

今年は慶祝すべき北桐会創立70周年です。多くの皆様にお会いできることを心より楽しみにしております。詳細につきましては、当誌面でご確認いただければと存じます。

今後も変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。同窓会が一層の活気と共に未来に向けて進んでいくためには、皆様のご意見やアイデアが不可欠です。どうぞよろしくお願いいたします。

特集

「令和で大切にしたい体験を通した学び ～生活科・総合的な学習の充実～」



『いかす』『わかる』をてんかいする
～未来をつむぐ人づくりを目指す生活科・総合的な学習の授業～

八幡平市立寄木小学校 校長

君 塚 裕 子

新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延により、私たちは、「今まで通り」では容易に解決できない課題が世の中に存在していることを再認識することになった。私たちは、このような先行き不透明で予測困難な社会を生き抜き、自分らしい自己実現ができる子供を育てていかなければならない。そのためには、「アンラーン」という言葉に代表されるように、従来の方法に固執するのではなく、時代や状況に合わせて学び自己の生き方を判断する力が必要であると考え。そして、このような力は、総合的な学習の時間で育成を目指してきた資質・能力でもある。

令和6年11月、盛岡市で、第33回全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会が開催される。大会主題は「『いかす』『わかる』をてんかいする」～未来をつむぐ人づくりを目指す生活科・総合的な学習の授業～である。『いかす』とは、岩手がもつ多様なひと・もの・こととのつながりの中で、子供がこれまで身に付けてきた資質・能力の活用を図ることである。『わかる』とは、具体的な活動や体験、探究的な学習活動を通して、概念的な知識や生き方を獲得していくことである。『てんかいする』とは、思いや願い、課題意識をもとに、『いかす』『わかる』を繰り返したり、新たな活動にかなげたりする探究的な学習を子供自らが創ることである。岩手県生活科・総合的な学習教育研究会では、「未来をつむぐ人」（獲得した資質・能力を活用・発揮し、新たな価値を創造する人）の育成を目指し、生活科・総合的な学習の時間における「『いかす』『わかる』をてんかいする」授業の在り方を、この大会で提案したいと考えている。

授業提案校は、盛岡市立杜陵小学校と盛岡市立本宮小学校の二校である。

盛岡市立杜陵小学校では、生活科・総合的な学習の時間における探究的な学習において、「学習の個性化」

（意図的な主体性の醸成、個の考えを生かした課題解決の場の設定）、「思考の自覚化」（対話や書くことによる思考の言語化）を手立てとして、「思いや願いをもち、主体的に学ぶ児童（杜陵小が考える未来をつむぐ児童像）の育成」を目指している。5年生総合「中津川の魅力を未来へ！」の実践では、中津川の様子を調査する中で地球温暖化の影響による中津川の変化に気付いた子供たちが、どのような行動をとるべきか、一人一人が考えをもち真剣に話し合う様子が見られた。地域にある現象と環境問題の関係に気づき、その解決に向けて真剣に取り組む姿、地球温暖化という大きな問題の解決と自分たちの行動の効果を様々な観点から話し合う姿が見られた実践であった。

盛岡市立本宮小学校では、コロナ禍で失われた関わりとの再構築を図り、「多様な他者との関わり」「多様な考えとの関わり」を手立てとして、「自ら学び、共に高め合う児童（本宮小が考える未来をつむぐ児童像）の育成」を目指している。6年生総合「本宮地域『宝積』プロジェクト」の実践では、校訓「宝積」の意味を考えその具現化を目指す子どもたちが、地域住民へのアンケート調査の結果をもとに、自分たちは何をすべきかを活発に話し合う様子が見られた。地域の方々と直接関わりながらさらに地域への愛着を深める姿、様々な立場から寄せられた多様な考えを関連付けて考え、よりよい行動について考えようとする姿が見られた実践であった。

両校ともに、まさに、未来をつむぐ子供の育成につながる実践を積み重ねている。来年度の大会では、イーハトーヴの地から、未来をつむぐ人づくりの具体像について、子供の姿と教師の姿をもとに、全国に発信していきたいと考えている。

（昭和63年 小学校教員養成課程 卒業）



生活科からの「とことん探究」で、「未来をつむぐ人づくり」を

大船渡市立猪川小学校

金 野 浩 二

令和6年11月に全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会岩手大会の開催を控え、開催校である盛岡市立杜陵小学校、盛岡市立本宮小学校の先生方をはじめ、たくさんの先生方によって生活科や総合的な学習の実践が行われております。素晴らしい授業を拝見するなかで、多くの先生に見ていただき、素晴らしい実践をつないでいきたいとの思いが強くなりました。

ここでは、盛岡市立仁王小学校（当時）の奥野淳平先生の生活科の実践「なかよくなろうね～わたしのちいさなおともだち～」(1年生)を紹介します。

「問題を解決するための思考を促す環境構成の工夫」を本単元における手立ての1つとしていた奥野先生は、ある日、数匹の「アカハライモリ」を教室に持ち込みました。すぐに興味を示し、反応する子供たち。先生は機を見て捕まえたときの動画を再生し、イモリの生息地、食べ物など多様な視点で子供たちの興味をさらに掻き立てていきました。その後も、いつでも観察できるように教室に水槽を設置したり、教室を水中に見立てたディスプレイにして子供自身がイモリと同じ気持ちになるようにしたりするなど、子供たちの思いを生かしながら様々な活動を行い、イモリに対する子供たちの思いを高めていきました。さらには、さり気なく虫眼鏡を置いて子供たちがミクロの目線で観察できるようにしたり、図鑑や子供たちが調べてきた情報のポートフォリオをいつでも見えるところに掲示したりすることで、子供は自ら問題を解決しようと取り組むことができました。このように環境構成を工夫することで、子供たちは主体的に問題解決に取り組み、気付きの質を深めていくことができるのだと感じました。

また、奥野先生は「子供が対象へ抱く思いや願いが異なれば、それを実現するプロセスも一人一人異なるはず」との思いから「一人一人の思いや願いに応じた複線的な学習活動」となるように手立てを組んでいま

した。例えば、イモリのお世話を継続してきた子供たちが「さらに仲良くなりたい」との思いを強くした際には、「どんなことをすればより関わりを深められるか」について一人一人が考える学習活動を設定し、問題解決に取り組むことができるようにしました。「イモリが陸地で休める場所を作りたい」と考えた児童は、試行錯誤を繰り返す大苦戦の中で、ついに野生のイモリの生息環境の情報に出会い、それを生かして見事に解決しました。また別の児童は、アカハラが苦手でも距離が縮められず、何とかしたいとの思いから、ビニル手袋をつけて手のひらに乗せ、慣れていくという作戦を生み出し、ついには手袋をとって撫でたり掴んだりできました。最終的には直接手で餌を食べさせることにも成功し、イモリの食べ方の特徴に気付くことができました。このように、一人一人の思いや願いをもとに目的を達成する探究活動を行うことで、気付きの質を高めることができるのだと感じました。

自ら問題を解決した経験は一生の宝物になることでしょう。また、この学びが総合的な学習での探究的な学習につながり、生きる力へとつながっていくのだと想像すると、とても楽しみになります。

岩手大会の主題は「『いかす』『わかる』をてんかいする」～「未来をつむぐ人づくり」を目指す生活科・総合的な学習の授業～。これからも多くの先生方と一緒に実践を交流し、たくさん学び合い、みなさんと「未来をつむぐ人づくり」を目指していきたいです。

終わりにになりましたが、本稿を執筆するにあたって、一関市立山目小学校の奥野淳平先生には貴重な実践と資料をご提供いただきました。深く感謝いたします。

(平成11年 小学校教員養成課程 卒業)

(平成31年 大学院教育学研究科教職実践専攻 修了)



他者と関わり、考えと関わる総合的な学習の時間

盛岡市立本宮小学校

矢澤 慎

盛岡市立本宮小学校では、令和6年度全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会岩手大会に向けて、生活科・総合的な学習の時間の研究を進めています。本校の研究主題は、「自ら学び、共に高め合う児童の育成ー探究の過程における関わりを通してー」とし、様々な場面で「関わる」ということを大切にしたい実践を行っています。

研究の重点は、大きく分けて2つあります。

1つ目の重点は、「多様な他者との関わり」です。児童の思いや願い、課題意識をもとに地域の方々や専門家と関わることで、地域のことを知ったり、深く考えたり、新たな課題を発見したりと子供の追究が連なり続けるようにしています。生活科における関わりとも関連させて、1～6年生それぞれの学年で発達段階の系統性をもたせるような関わりを位置付けています。さらに、他者との関わりを単元計画の中に位置付け、効果的に関わることをできるようにしています。

今年度の実践では、以下のように地域を中心として関わる対象を発達段階に合わせて広げていきました。

- | |
|-------------------------|
| 1年生…他学年、学校職員、見守り隊 |
| 2年生…1年生、近隣商店街、身近な公共施設の方 |
| 3年生…各町内会の老人クラブ、民生委員の方 |
| 4年生…伝統さんさ、神楽、地域の商店の方 |
| 5年生…地域の地区会長、広告デザイナーの方 |
| 6年生…広く地域の様々な方々 |

例えば5年生の単元計画では、第1小単元で地区会長や地域をよく知る方、市役所の方と関わることで地域の現状や課題を知り、第2小単元では、自分たちで考えた解決方法についてよく知る専門家と関わり、第3小単元では、課題を解決したことを全体に発表することができるようになりました。

子供たちは、何度も地域の方と関わることで次の時間にやりたいことが浮かび上がり、さらに強い願いを

もって実現に向けて取り組み続けました。また、自分たちのために時間を割いてくださる地域の方に感謝の気持ちを自然な形で表していました。

2つ目の重点は、「多様な考えとの関わり」です。思考ツールやICTを活用し様々な他の考えを共有したり、多様な考えを関連付けたり、統合したりすることで、個人と集団の探究の促進をねらいました。

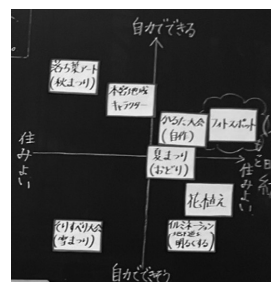
さらに、授業中に言語活動を取り入れたり、終末などに振り返りを充実させたりすることで自分の考えを再構成できるようにしました。

思考ツールについては、座標軸やマトリックスを用いて比較したり、クラゲチャートを使って関連付けたりしました。

ICTの活用としては、ロイロノートを使って全体で直接互いの意見を比べ、自分たちが納得するまで話し合い、目的を達成するためにはどうすればよいか考えました。互いの意見を比べることによって、自分の考えを再構成しながら考え続けることができました。

本研究によって、地域と関わり、考えを関わることで、互いを深く理解し、本校の校訓「宝積」を目指し、未来を切り開く人材を育てていきたいと考えています。

(平成8年 小学校教員養成課程 卒業)



座標軸を使い意見を比較する



マトリックスを使って話し合う



話し合いの結果を発表する



生徒が主体的に探究する職場体験活動

二戸市立浄法寺中学校

田 村 敬 済

多くの中学校では、総合的な学習の時間において職場体験活動を取り入れているのではないだろうか。本校でも職場体験活動を取り入れているが、毎年同じような活動が展開されることや、生徒の課題意識に沿った活動にならないことなどの課題が挙げられていた。

そこで、生徒が主体性をもって職場体験活動に取り組み、働くことについて探究することができるようにしたいと考え、単元を二つの小単元で構成した。一つ目の単元では、多様な企業や働く人々から収集した情報をもとに、様々な角度から働く意味を考える。二つ目の単元は、職場の課題を見出し、その解決に取り組む。本稿では、二つ目の単元で、生徒が職場の課題を知り、その課題の要因を整理・分析し、効果的な解決方法を考え、提案するという活動の概要を紹介する。

生徒は、一つ目の単元で働く意味について情報収集をするために職場見学を行い、インタビューをした。その中で、どの企業も職場内で課題を抱えていることを知り、課題解決の方法について自分たちの考えを提案したいという思いをもった。そして、職場の課題の内容や要因について詳しく調査した上で、職場の環境や労働者の数、安全性やリスク等を関連付けて思考し、解決策を考える活動を、協働的に進めていった。

例えば、社会福祉協議会では別々の部署が施設内で離れていてコミュニケーションが取れないという課題を抱えていた。生徒は、メールやSNS等で解決できると考えて提案をしたが、ハード面の問題からインターネットを活用できないことを知る。そこで、他県にある同じように複数の部署をもつ社会福祉協議会に電話インタビューを行い、課題解決の方法について情報収集を行った。この調査の過程で、同様な課題を抱えている施設が多いことを知り、生徒は課題解決の意義についても気付いていくことができた。そして、収集した情報が実現可能な方法や効果があるものなのかどう

か整理・分析をした。そこから、社報を職員が出入りする玄関スペースに掲示し、部署の仕事内容について情報共有をするという解決案を考えた。職場体験活動では、1日目の活動終了後に社報を作成し、2日目には実際に施設内に掲示し、職場の方々から、次のようなフィードバックをいただいた。

難しい内容の課題に取り組み、複数の法人を比較しながら解決方法を調べていただき、ありがとうございました。情報共有のフォーマットとして参考にさせていただきます。長い間働いていると、初心を忘れているなど感じ、改めて考え直すきっかけとなりました。

生徒は、自分たちの解決案が企業や地域のために貢献できているという充実感や満足感を得ることができた。

単元の最後に改めて「働く意味」について論述する活動を設定した。学習を通して自己の変容や以前よりも地域貢献への気持ちが高まったことを実感した生徒の記述の一部を紹介する。

私は働くということは、最初はお金のためだと思っていた。でもお金だけではなく、人の役に立つことや達成感、やりがいなどのどれもがつながっているように思いました。職場体験活動を通して地域のために働いている人たちがいることを知り、自分たちも地域のために何ができるかを考えていきたい。

このように、探究的な学習の過程の中で意図的・計画的に職場体験活動を位置付けることにより、中学生であっても社会人の一員であるという当事者意識をもって課題解決に本気で取り組む姿が見られた。今後も、生徒の課題意識に基づく探究的な学習の在り方を見直し、自立した学習者を育成していきたい。

(平成25年 学校教育教員養成課程 学校教育コース
数学サブコース 卒業)

桐の葉物語



今のわたしがあるのは・・・

浅 沼 夏 希

2018年4月。「いよいよ大学生か・・・。」

高校とあまり変わらない顔ぶれに安心感を覚え、新しい出会いや華の大学生活に期待を膨らませ、入学式を終えた。教育学部には高校時代からの友人が多くいた。その中でもキャンパス内に響く声で「夏希～!!!」と呼ぶのがKだ。彼女とは高校2年生からの親友で、大学のこと、プライベートのことについての悩み相談をしたり、くだらないことをしてたくさん笑い合ったりする仲だ。大学生活でもKと私の仲は変わることなく、授業を一緒に受け、空き時間には、たわいもない話で大笑いする日々を過ごした。

時は流れ2020年1月。全国ニュースであの報道が流れた。この報道後、新型コロナウイルスが国内で流行し始めたのだ。その影響はもちろん大学にも及んだ。授業は休講になることもあれば、オンラインで行われることもしばしばだった。アルバイト先も休業になってしまった。当たり前前に授業があり、友達に会え、アルバイトができる、そんな日常が急に失われた衝撃は、当時の私にとって言葉に表すことができないほどだった。緊急事態宣言やステイホームを謳われ、顔を合わせることもないオンライン授業が続き、レポートに追われる毎日に嫌気がさしていた。「華の大学生活なんてもう訪れないのだろうか。」「このままパソコンと向き合うだけで大学生活を終えてしまうのだろうか。」と、漠然とした不安も押し寄せていた。

その時、一件のメッセージが届いた。

「元気?! 今、大変な時期だけど、止まない雨は無い! またみんなで会ってたくさん笑い合おうね!!」

親友のKからだった。彼女自身も不安な気持ちや大変な思いもしているはずなのに、温かい言葉をかけて元気付けてくれた。そのメッセージによって、先が見えず気持ちが沈んでいた私は救われた。今でも困難に

ぶつかった時や、悩んでしまう時にこの言葉を思い出し、勇気付けられている。「きっと大丈夫。」そう思わせてくれるこの言葉は私にとって宝物となった。

就職を機に、親友Kとは以前のように会うことは出来なくなったが、今でも定期的に連絡を取り、予定を合わせ会っている。大学時代の私を救い、今でも勇気付けられる言葉をくれたKとまたいつか、当時のように笑いながら大学時代の話に花を咲かせたい。

そして、私が今でも大切にしている言葉がもう一つある。それは学部3年の夏、教育実習でJ先生に言われた一言だ。

私は幼い頃から周りの様子ばかり気にして、自分の意見を主張することが苦手だった。教育実習中も、他の実習生に影響を受け、自分の授業作りに迷いが出た。加えて、子供が私の授業や関わり方をどう思っているのかを気にするあまり、私が本当にしたいことが分からなくなってしまった。「ああ、こんなに自分の軸がない私は、教員に向いていないのではないか。」実習中に何度もこの言葉が頭をよぎった。

教育実習もいよいよ終盤となった時、J先生が私に声をかけてくれた。

「したいことを思い切り挑戦できるのは今! だからこの実習期間でやってみよう!」

J先生の明るい声と前向きな言葉で心がとても軽くなった。そこから子供としたい授業を作る事ができ、その授業を心から楽しみながら学ぶ子供の姿を見る事ができた。この経験がなければ、私は教員になることもなかっただろう。挑戦する後押しとなる言葉をかけてくださったJ先生は私にとっての憧れである。今後とも研究と修養を重ね、教員として成長することで感謝の気持ちを伝えていきたい。

(令和4年 学校教育教員養成課程 小学校教育コース 卒業)



Adventure

大 瀧 航

私は東日本大震災の年に入試を受け、テレビのテロップで合格を確認し、岩手大学に入学した。それからの生活はまさに冒険の連続だった。その中でも、特に思い出に残っている3つについて書いていきたいと思う。

1つ目は、カナダへの語学研修だ。カナダのヴァーノンという街にあるセカンドランゲージスクールに3週間短期留学した。英語の授業を英語で受け、街で英語を使って生活していることに感動を覚えた。それらの感動を超えて印象に残っていることがある。それは「家族の役割」についてである。私は、ホストファザー、マザー、私より2歳年上の兄、2歳年下の弟、猫のいる家庭にホームステイをした。とても明るく、優しい家族でいつも温かく接してくれた。そんな家族だったが、ある日、ホストファザーに英語で叱られたことがある。「なぜワタルはいつも椅子に座って、ご飯が出てくることを待っているんだ!」と。英語の内容は理解することができた。しかし、なぜ叱られているのか最初は分からなかった。英語の教員となり、ホームステイをしている場面を授業で扱った際に理解した。ホストファミリーに対しても、家族同然のように接することが当たり前だということ。そして、カナダでは年齢や性別関係なく、自分ができる家事を分担して生活していくことが当然だということ。この2つのことを学んだ。今まで家族のために自ら動かなかった自分が恥ずかしくなった。

2つ目は、タイでの英語教育実習だ。中学生と高校生が通うバンコクの大きな学校に、英語を使って日本の文化を教えてきた。日本の生徒は、授業の内容が分からない時には、日本語を通して理解を促すことが可能だが、タイの生徒はタイ語で質問をしにくいため意思疎通が難しかった。伝えるために写真を提示する等、試行錯誤した。このことから、視聴覚教材が大切であ

ることに気づかせてくれた実習であった。加えて、現地の先生の生徒への接し方も大変勉強になった。ホームステイ先のホストマザーは、私が実習を行った学校の美術の教員だった。ある日の昼食時間に、ホストマザーが、学校に昼食を持ってくるができない生徒へご飯を与えているところを見た。あとで聞くと、「自分の生徒だから我が子のように大切にしている。困っていることがあれば助けてあげている。」と話してくれた。その時、私はハッとした。教科を教えることだけが教師ではない。子どもたちに様々な面から愛をもって接することが大切であると教えられた。

3つ目は、中国への日本語教育実習だ。北京にある清華大学で日本語の授業を受講している学生に、日本語を教える実習を行った。日本語を日本語で教えることは難しかった。授業後、ほぼ毎日私たちは清華大学の学生たちと街を歩きながら交流をした。ある日、天安門に現地の学生と行った。門までの長い行列に並び、荷物検査を受けて観光した。その列に並んでいる時に、清華大学の学生からこんな質問をされた。「私たちは軍に入り、国のために働くことを誇りに思うのですが、日本の若者は、軍隊で働くことを誇りに思っていますか?」と。この質問にうまく答えることはできなかった。まず自衛隊がどんな活動を行っているかよく分からなかった。そして、日本のために何かをやりたいと思ったことがなかった。自国を誇りに思うその学生が羨ましく感じた瞬間だった。

百聞は一見に如かず。これからも自分自身が直接感じ、仲間と共に大切なことを見極め、世界に羽ばたく岩手っ子を育てていきたい。

(平成27年 学校教育教員養成課程 学校教育コース
英語サブコース 卒業)

大学時代を振り返って

北 村 かおり

私が岩手大学を卒業したのは平成14年の3月。あれから間もなく22年の歳月が経とうとしている。その間岩手から離れたことはなかったが、岩手大学とはすっかり疎遠になっていた。しかし、令和2年春の異動で岩手大学教育学部附属特別支援学校に赴任し、再び岩手大学が身近な存在になった。大学の先生方とも研究や学習会でお世話になり、お話をすることが増えた。また、たった2回ではあるがゲストスピーカーとして講義をさせていただいたり、本校での教育実習や介護等体験を通して、学生達と関わったりする機会ができた。教師の立場で学生達と関わっていると、そのひたむきな努力に感動したり、感覚の違いに唖然としたりするのだが、同時に、霞がかかった自分の学生時代を思い返し「自分もこんなだったかな」と考えてしまう。

大学生活で最も思い出深いのは、やはり3年時の小学校での教育実習だ。1か月の実習は楽しくもあったが、永遠に終わらないのではないかと思うほど、花のキャンパスライフというぬるま湯に浸かりきっていた私には過酷な日々だった。私が配属されたのは5・6年かつら組、複式学級だ。授業中とんでもなく勘の良い子ども達に助けられたことは数えきれない。自分で言うのもひどい話だが、ポイントを押さえ切れない発問、意図の見えない質問で、子ども達はさぞかし混乱したことだろう。配属学級担任の阿部先生は心の中で何度ため息をついたことか。今では容易に想像できる。今回の寄稿にあたって、実家の押し入れから実習日誌を取り出し読んでみた。頭でっかちではあるが、どうしたら子どもの生き生きした姿を引き出す授業ができるか真剣に考えていたのだと伝わる内容で、なんだか嬉しかった。そして、実習時に繰り返し阿部先生が仰った「子どもの力を信じて」という言葉を思い出した。あの時はその言葉を、子どもが適切な答えに辿り

着けるように授業を計画し、準備をやるだけやったら後は子どもの力を信じるしかないを受け止め、必死で教材研究をした。今は完璧に事前準備をすることの難しさを身をもって知り、すぐに結果が出なくても長いスパンで子どもの成長を考えられるようになった。最後に子どもを信頼して任せることができるように、今は私も子どもにどのような力が必要なのかと考える癖は阿部先生にいただいた言葉の延長線上にあるように思う。それにしても、実習日誌の文章力のなさやTPOをわきまえない言葉選びは今より一層酷くて、本当に恥ずかしく阿部先生に申し訳なく思った。次年度の教育実習では、もっと学生を温かい目で見守ることができると思う。

もうひとつ思い出深いのは、2年生の春に入部した競技舞蹈部。1学年下の友達がたくさんでき、先輩達にやさしく教えてもらいながら、新しいことを覚えていくことがとても楽しかった。ドレスを着て颯爽と踊る華やかなイメージとは裏腹に、筋トレや基礎練の単調な練習の繰り返し、きつい合宿、ピンヒールによる足の痛みなど、その体育会系っぷりには驚かされたが、気の置けない仲間と過ごしたかけがえのない4年間だった。飽き性ですぐにさぼり癖が出てしまう私が、社会人になっても1年間部室に通い続け、卒部までやり通すことができたのは、まさにその出会いがあったからだと思う。

今年度、コロナ禍で延期されていた岩手大学養護学科の同窓会が7年ぶりに開催される。それに伴い、久しぶりに同級生とも連絡を取り合い、同窓会での再会を約束した。今はそれぞれの道で大人の顔をして頑張る私達だけでも、当日はちょっと学生気分に戻って懐かしい話でもしたいと思っている。

(平成14年 養護学校教員養成課程 養護教育学科 卒業)



「教育実習」の思い出

川 村 憲 弘

高校時代、ひたむきに白球を追いかけた影響で浪人生活を余儀なくされた自分にとり、大学生活はまさに「解放の瞬間」の到来でありました。よって、とても原稿に書けない大学時代の思い出はたくさんあります。一方で、真面目に学問に励んだ記憶はほとんどなく、恥ずかしい限りです。そんな私でも、4年生の時に経験した教育実習には真剣に取り組みました。今回は、その時のことをお伝えしたいと思います。

取得予定免許状の関係で、幼稚園、小学校、養護学校（現在は特別支援学校）の教育実習を希望しました。最初の実習は、岩手大学教育学部附属幼稚園での教育実習でした。かけ寄ってきた子どもたちを抱っこして高く上げたり、振り回したりすることで喜ばせていましたが、実際のところ、初めて向き合った園児たちに自分が振り回されていました。実習の期間はわずか2週間なので、1週目が終わり慣れてきた頃には、まとめの授業を考えなくてははいけません。なんとかまわりの先生方の力を借りながら準備した授業、開始直後の黒板を使っの説明を終え振り返った瞬間に、多くの子どもが勝手に遊び始めていた時には、倒れそうになりました。小さい子どもたちがもつパワーと可能性や、先生方の子ども理解の視点の鋭さに感心した2週間でした。次の実習が、夏休み明け5週間に渡る小学校での教育実習でした。自分の出身校だからという理由で岩手大学教育学部附属小学校に行きました。配属された学級も自分が2年間過ごした高学年の複式学級でした。5週間という長丁場でしたので、8月の最終週にスタートし、終わったのが10月でした。ほぼ初めての着慣れないスーツ（幼稚園実習は私服でした）で汗だくになりながら紹介式に参加したのに、実習が終わる頃には、すっかり秋が深まり、肌寒さを感じたことを覚えています。毎日が全力投球でしたので、若かった

とはいえ、くたくたになりながら帰宅していました。当時は土曜日が休日ではなかったので、週に休みが一日しかない中、みんなで励まし合いながら取り組んでいました。日々の授業に加え、岩山に上った学級レク、高学年の遠足で行った駒ヶ岳の登山など、たくさんの思い出があります。最後の実習は、養護学校での教育実習でした。実習先は岩手大学教育学部附属養護学校です。冬の気配を感じる11月に始まったので、周囲の友人が、小学校での実習を終え卒業に向けた動きを本格化させていく中でのスタートでした。正直、春先に実習への参加を希望したことを後悔していました。ところが、今思えば、この3週間が自分の人生の岐路ではなかったかと思っています。障がいのある子どもたちと3週間生活する中で、「させる」のではなく「することのできる準備をする」ことの大切さを学びました。真っ暗になってから帰宅する毎日でしたが、実習が終わる頃には、心から参加してよかったと実感したことを記憶しています。

親に勧められ大学に入り、まわりに流され採用試験を受験し、なんとなく教員になろうと考えていた自分の思いが、教育実習を経験することで、変わってきていることは感じていました。そして、最後に経験した養護学校での子どもたちとの出会いの中で、「この子どもたちのために」という思いを持つ経験をさせてもらい、教職を目指す決意を固めることができました。現在、退職まで数年になりましたので、おそらく最後の学校に勤務しています。おかげさまで、これまで勤めた様々な場所で、常に「子どものために、子どもの笑顔のために」という気持ちで勤務することができました。自分の教職人生を支えてくれた教育実習（子どもたち、指導教官の先生方）に心から感謝しています。

（平成元年 小学校教員養成課程 卒業）



大学時代を振り返って

千葉 大暉

(学校教育教員養成課程 小学校教育コース
英語サブコース)

私は大学を選ぶ際「教員になりたい!」という熱い思いを持っていたわけではありませんでした。国立大学か難関私立大学を目指す生徒が多数派の進学校で私もどこか何も考えずにその風潮に吞まれ、気付いたら盛岡にいて、教員養成のための授業を受けていました。いざ授業が始まると「そういえば小中学校嫌いだったな」と自分の過去を思い出しました。私はいわゆる“大人”だね。と言われてしまう子どもでした。常に先生の顔色やクラスの雰囲気ばかりを気にして、自分を周囲に必要な人間にカスタマイズしていました。もちろん毎日が苦しく学校が嫌いになりました。しかし、周囲の学生と話すうちに自分のような人間は意外と珍しくないということが分かりはじめました。「そういう

人間だからこそ教員になるんでしょ」と教えてくれた学生もいました。教育実習が始まると多くの学生がめまぐるしく変わっていきました。学生たちの授業をするときの表情、子どもたちと触れ合うときの表情は大学にいたときの表情とは全く違い、それを見るたびに心が少し動くような感覚を覚えました。一方、自分は出来損ないで成長スピードも遅く毎日怒られてばかりでしたが、子どもたちからの授業が楽しかったという声や指導の先生から唯一英語の授業の導入だけは褒めていただいたことなど教員の仕事の素晴らしさを感じることができました。しかし、いざ教員採用試験の出願期間が迫ると出願する勇気がでませんでした。その後「みんなできなくて当然だよ。だから必要なのは勇気だけ」と周囲の学生が教えてくれ、自分に必要なものの正体を知ることができました。春からは修士課程に通いながら非常勤講師として働く予定です。その後の進路は決まっていますが、あの実習で見た学生たちの表情を心の中の宝箱の中に大切にしまい、自分が勇気を持って一歩踏み出す日を楽しみに生きていきたいと考えています。

「あたりまえ」に感謝して

佐々木 星乃花

(学校教育教員養成課程 小学校教育コース
国語サブコース)

私の大学生活はコロナ禍の中で始まった。入学式やオリエンテーションは中止、授業は全てオンライン。受験時に思い描いていた大学生活とはほど遠く、友達もほとんどできなかった。高校の頃の担任の先生に憧れて教師を目指し、頑張ろうと意気込んでいた矢先であった。

それからもう3年が経ち、卒業という節目の日を迎えようとしている。正直、私の大学生活は非常に充実していた。それは、コロナ禍を経験したからこそ、今まで当たり前にあった日常を大切に思えるようになったからだ。学業はもちろん、サークル、アルバイト、習い事、友人や家族と過ごす時間…すべてに感謝している。

そんな私が本気で教師を目指し始めたのは、大学3年生の時の教育実習である。私には、上手く子どもた

ちと関われるか、教壇に立ち、授業をすることはできるか、という大きな不安があった。しかし、子どもたちや先生方は温かく迎え入れてくれ、実習に慣れてくると、不安よりも楽しさや充実感に溢れていた。そうになると、考えるのはより良い授業の作り方である。どうすれば子どもたちが楽しく学びある授業にできるのか、子どもたちが主体的に学ぶためにはどうすれば良いか、など授業の質に悩むようになった。特に、授業内で活動を取り入れる際、何のために取り入れるのかを、教師が理解するだけでなく子どもたちにも自覚させることが本当に難しかった。毎日夜遅くまで授業の構想を考えた。実習は楽しいことばかりではなかったが、子どもたちの笑顔を見ると、頑張ってた良かったと思えた。

教師の魅力は、子どもたちの成長を間近で見られること、そして、子どもたちとともに自分自身も成長し続けられることであると、教育実習を通して学んだ。

そして、私は来年の春から、中学校の国語教師として子どもたちと過ごすことになる。コロナ禍だったからこそ学べた多くのことをこれからも大切にし、一人一人に向き合い、寄り添い、出会いに感謝しながら生きていきたい。そして、このことを子どもたちにも伝えられるような教師になりたい。



教育実習での“経験”と“出会い”

佐藤 桃華

(学校教育教員養成課程
特別支援教育コース)

3年間の大学生生活を振り返ってみると、授業やサークル活動など様々な面において学びの多い3年間であったと思う。その中でも、私にとって将来の夢が明確になった出来事は、今年の夏に行われた主免教育実習である。私は教員になりたいとの思いで岩手大学に入学したが、目標とする校種や教科が自分の中で定まっておらず、教員という夢も漠然としていた。しかし、教育実習を終えた今、「小学校教員になりたい」という思いが強くなった。それは教育実習での“経験”と“出会い”がきっかけだと感じている。

教育実習では教員という立場で子どもたちと関わったり、授業を行ったりする中で、実際の学校現場を肌で感じた一ヶ月であった。子どもたちのことを考えれば考えるほど授業の行い方に悩んだり、自分の力のな

さを実感したりする日々だったが、毎日成長していく子どもたちの姿に勇気づけられ、最後まで子どもたちと向き合い続けた経験は自分を大きく成長させた。また、子どもたちの成長を間近で見ることができることに教員のやりがいを感じた。

配属校の子どもたち、先生方、同じ学年配属だった実習生との出会いも成長へと繋がった。子どもたちの笑顔、真剣な表情を見ると、もっと自分にできることはないかを考えるようになった。そして、常に真摯に向き合い丁寧にご指導してくださった担当教官やどんな時でも支え合うことができた仲間がいたからこそ、前向きに実習に臨むことができた。さらに、他学年他クラスの先生方との関わりから、教員同士で連携を図ることや教職員全体で子どもたちの成長を見守ることの大切さを学んだ。

私は3年間の大学生活で沢山の人に出会い、支えていただき毎日充実した日々を過ごすことができていた。残りの大学生活においても教育実習で得た経験や感情を胸に、出会いに感謝しながら未来ある子どもたちと共に学び、共に成長していけるような教員を目指して努力し続けていきたいと思う。

幸せと感謝

竹村 天

(学校教育教員養成課程 理数教育コース
理科サブコース)

世の中がコロナによって制限されている中で始まった大学生活だった。東京から出て盛岡に来たものの、毎日パソコンと顔を合わせる毎日。この制限された日常が少しずつ明けていき、大学生活という自由な時間が徐々に取り戻されていった。やりたいことができる幸せについて1から考えながら過ごす4年間になった。

まず取り戻されたのは部活動だった。対面授業が始まる前に部活動に参加していたため大学初めての友達は部活仲間であった。学生主体で活動する経験はとても大きなものであり、中学校・高校時代に思う存分部活動に打ち込むことができたのは当時の顧問の先生方のおかげであることを再認識し、感謝と尊敬の念が強まるばかりであった。

1年生の夏休みの集中講義から対面授業が再開され

た。初めての大学の授業に慣れないことばかりではあったものの、実験やレポートを仲間と協働して取り組む時間にはパソコン相手では決して得られないものがあった。私の出身地である東京では多く大学で対面授業が再開されておらず、思うように大学生活を送ることができない友達ばかりだった。当時をふり返ると、1年生後期の段階で対面授業を再開して頂けたことは大学生活の充実度を左右するものであったと感じる。

2年生になってから多少の規制はありながらも様々な実習に取り組んだ。中でも教育実習はこの大学生活で最も印象に残った時間の1つである。人生で初めて教壇に立ち生徒を目の前にしたときは、不安や緊張を感じつつも模擬授業では見られない生徒のリアルな反応に感動したことを今でも鮮明に覚えている。教員という仕事の素晴らしさを教えてくれた生徒並びに先生方、教員になるための基礎を培ってくださった教授の方々に巡り会えた事がこの4年間の財産であり、これからの自身の学びに活かさなければならない。

来年度からは教壇に立つ。分からないことばかりで苦しみことも多くある中で、4年間で学んだ教員の魅力を決して忘れることなく子供の目線で考え、子供と共に成長していけるような教師になる。



過ぎ去った時間の豊かさに感謝して

社会科教育科

今 野 日出晴

2008年4月に岩手大学に着任して15年が経ちます。愛媛大学から岩手大学に移る時に、なぜ、そんなところへ行くのか、と驚かれたのを思い出します。確かに、愛媛の温暖な気候に比べれば、格段に厳しい気候で、そう言うのも無理はないのかと思いながら、それでも、同じ東北の山形出身の私にとってみれば、釈然としないうところがありました。そんな時に、同僚から、厳しい環境だからこそ、粘り強く、容易に崩れない人間をつくってきたんじゃないのか、と言われ、背筋が伸びるような気持ちになりました。

振り返れば、風土論ではないにしても、その言葉に促されながら、そうありたいと思いながら、過ごしてきたような気がしています。

厳しい冬も、それを乗り越えた先の、岩手の春の美しさは例えようありません。桜をめぐって、いくつもの名所をまわり、夏の木々に癒され、秋の紅葉にも心をうたれました。これほど自然に近い気持ちになったことはありませんでした。東京での慌ただしい生活のなかでは、意識することのなかった豊かさでした。そして、盛岡市史や北上市史、そして遠野市史と、自治体史の編さんに関わったことで、頻繁に地域の人びとと関わる（聞き取りも含めて）ができたことは、忘れることができません。厳しい環境のなかで、地域に根ざすとは、地域に暮らすとはどういうことか、「粘り強く、容易に崩れない人間」の姿を見ることができたように思います。

もちろん、学部や附属小学校での経験も、そうした気持ちは裏切られることはありませんでした。社会科では、「気取った」言葉を重ねて煙にまくような、空虚な議論の姿はありませんでした。あくまで、実質をともなったものをつくりだそうとしていたように思います。仮に、対立したとしても、そこでの実質は担保されていました。

そして、授業のあとの学生たちのコメント・カードやレポートには、考えさせられました。ひとつひとつのコメントがさまざまな視点から展開されていて、それを分類し、次の授業で、それらに応答していくのですが、「現代若者論」の輪郭（歴史意識と現在意識）をつくることのできるような豊かな内容でした。

また、附属小学校校長の任にあったとき、附属小の子どもたちと万里の長城に登ったことがあります。子どもたちは軽やかに登っていくのですが、私は、どんどん遅れて最後尾になりました。それを見ていた子どもたちが、「校長先生、ガンバレ！」「ガンバレー！」と声を限りに励ましてくれました。不思議なもので、その豊かな声に應えていくうちに、力が湧いて、ゴールすることができました。思い出たびに、心が温かくなってきます。もちろん、附属小学校の先生方の子どもたちに向きあう、真摯な姿勢には驚かされるばかりで、この紙幅では、書ききれぬものではありません。附属小学校の教育は、全国にも誇れるものです。北京大学附属小学校の校長が、交流を求めてくるのには確かな理由があるのです。

現在は、効率化の名のもとに、さまざまなものが切り捨てられていく時代かもしれません。それゆえに、切り捨てている実質を覆い隠そう、表面を「気取った」言葉でとりつくろうとしたり、自分の利益のために、「悪いようにしないから」と他者を誘導したり、と、もしかすれば、「粘り強く、容易に崩れない人間」のあり方とは、ほど遠い状況が生まれているのかもしれない。それゆえに、どこに足場をもって、立とうとするのか、そんなことを確認しようとするとき、過ぎ去った時間の豊かさを感じるのです。

本当にありがとうございました。感謝します。



岩手大学で学んだこと

数学科教育科

吉 井 洋 二

ちょうど10年前、私は数学の教授として岩手大学に赴任しました。前任校の秋田高専でも数学を教えていましたが、今度は数学教師を目指す学生に教えるということで、身が引き締まる思いで「仙岩トンネル」を越えました。

秋田高専では、微分方程式、ベクトル解析、複素関数、フーリエ解析など、学生にとってかなり高度な内容を教えていました。ただ高専では、工学で使えることに重点をおくため、定理の証明などは飛ばす計算重視の詰め込み型授業が普通です。これはこれで、解析系が専門でない私にはとても勉強になりましたが、私の専門である代数学を学生に教えたいという願望が芽生えてきました。そんなとき、岩手大学の教員公募を見つけたのです。採用が決まったときの喜びは今でも忘れることができません。これでやっと自分の好きな代数学の授業ができる、セミナーで学生と議論ができると胸躍らせました。

実際、岩手大学に赴任してみて、私の教育活動および数学の研究は、期待通りの充実したものとなりました。少人数のクラスなので、じっくり考えながら進める授業、必要な証明は飛ばさず、それでいて計算練習もしっかり行うという授業を実現できました。4年生のセミナーでは、学生が様々な問題を提起してくれるため、学生と一緒に研究しながら私も多くの発見をすることができました。例えば、「循環小数とMidyの定理」、「ガロア理論」、「マルコフ数」、「カプレカ数」、「シュタイナーの円環定理」、「エジプト分数とシルバスター数列」、「デカルトの円定理」、「ルービックキューブとアフィン変換群」、「カタラン数」、「ペル方程式と連分数」、「有限アーベル群の基本定理」、「二元連立線形合同式」などです。

数学とは関係ない発見もありました。それは、新入生を対象とした「基礎ゼミ」においてです。ご存じのように、以前の「基礎ゼミ」はサブコースごとに行っ

ていました。大学で習う数学は、高校までのスタイルから脱皮しないとなかなかついていけません。ましてや高校の数学IIIを履修していない学生もいるので、「基礎ゼミ」は大学で習う数学の基本概念や証明の仕方を確認する格好の場でした。ところが数年前から制度が変わり、教育学部の学生をバラバラにして作ったクラスでの「基礎ゼミ」に変わりました。個人的にはこの新制度に反対していたのですが、いざ担当してみて、数サブ以外の学生の考えや雰囲気を知ることができ、とてもよい制度であると感じるようになりました。

教育学部の学生は、複数の教育実習、複数免許取得、震災学修や学校安全学、特別支援学校での実習など、とても多忙です。いま世界で起きている多くの問題を考える余裕などないのではないかと思います、せめて世界情勢について調べて発表してもらおうと思いました。これから幾度も必要となるプレゼンの練習にもなると考えました。「ウクライナ戦争」、「北朝鮮と核の問題」、「発展途上国の子供の貧困や教育」、「イスラエルにおける宗教問題」、「シリアの内戦」、「AIによるフェイクニュースの問題」というテーマが学生から提起されたので、グループごとの発表形式にしました。今どきはネットで簡単に歴史的背景や現在の状況などを調べることができるので、教育的にどれほど価値があったか判断できません。ただ、これらの問題をみんなで考えたことは今後何かのためになると思いました。因みに、「中国と台湾問題」が出なかったのも、自分も調べて、こんな感じで発表してくれればいいですよ、そんなに難しいことまで調べる必要はないですよと、例を示すことで私もたくさん勉強させてもらいました。

正直言って、まだまだ岩手大学で学生と共に学びたいと思っています。来年度以降は非常勤講師としてお世話になる予定ですので、皆様、どうぞよろしくお願いいたします。「あの先生まだいる」なんて言わないでください。



ホヤから広がった私の世界

理科教育科

梶原 昌五

平成元年4月に岩手大学に着任し、理科の生物学を担当して35年間お世話になりました。当初の住居は「ハーモニカ長屋」と呼ばれた北山宿舎でした（現在は改築）。その後3回の引っ越しをしましたが、退職後も自然と人が素晴らしい盛岡に住む予定です。

さて、私は教員公募制度が始まる前の採用でした。東北大学の博士課程に所属する学生で、青森の浅虫臨海実験所でホヤの研究をしていましたが、ある時、「岩手大学の先生が来たので歓迎会をする」との話があり、なぜか大勢の実験所員が集まる中、当時岩手大学教授の星野善一郎先生の真ん前に座らされたのを覚えています。つまり、星野先生は私がどういう人物であるか、その目的を知らせずに観察にいらっしゃった、というわけです。その後、岩手大学に呼ばれ、面接や口頭試問ののち、「君が助手の第一採用候補だが、来てくれるなら連絡して欲しい」と言われ、当時30歳になり、将来的にも実家の事業の電話番しかないな—と考えていた私は、不安がいっぱいのまま、お話をお受けしました。当時の私には、研究は楽しく、ずっと続けたかったのですが、何者かになりたいというビジョンは一切無かったのです。

ただ、そういう私も子ども時代には学校の先生になりたいという夢を持っていました。ところがそのうちに海に興味を持ち始め、環境問題や二百海里問題を解決する研究者になりたいと、将来の夢が変わっていききました。そのためには大学院に行かなければならないと思い、基礎を学ぶために地元の岡山大学理学部生物学科に入学しました。卒論でホヤに出会い、岡山大学には博士課程が無かったので東北大学大学院に編入し、自由気ままにホヤの研究を続けていたのです。

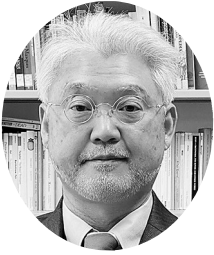
さて、そんな私ですが、教育学部では助手も教授も同じ数の授業を担当していました。研究費も同じです。当時の研究費は今の3倍、教員数は今の2倍、一人の

授業担当数は今の2分の1でした。

最初の頃は「教育学部にはいろんな専門家がいるから、いろんなことが聞けるなあ」と喜んだのも束の間、まずは研究対象であるホヤを確保しなければなりません。内陸の盛岡にはホヤはいませんから、養殖する場所を求めて三陸沿岸を車で走り回り、山田町の大沢地区にあった町営の水産研究所（津波で無くなりました）の筏からロープを吊させていただくことになり、年に何度も通うことになりました。そして2011年3月11日の東日本大震災大津波に遭い、友人も亡くしてしまいましたが、漁師さんたちのお手伝いをさせていただくことになりました。これはとても忙しく、それゆえに非常にやりがいのある仕事になりました。生物学や理科教育を基本とし、環境教育にも手を広げていた私がついに水産学にも手を広げ、さらには社会学の麦倉哲先生に誘われて被災された方々の聞き取り調査にも深く関わることになったのです。震災復興支援に関われたことは私の人生で最も大きな出来事でした。

そのようなわけで、私の研究室からは75名の学生さんたちが巣立って行きました。彼らはそれぞれ悩みながら今もどんどん成長しています。私に関われたのは彼らの人生のうちのほんの短い期間にしかすぎませんが、それぞれの時代にその時の私の年齢と経験でできる限りの関わり方をしてきました。中には退学した人もいますが、みんな立派にやっています。そういう学生さんたちに育てられたのはこちらの方だったなあと、35年間を振り返って感謝しています。

これからも健康に気をつけていきますので、会う機会がありましたらどうぞよろしく願いいたします。



Lost in London, Found in Morioka, and the river flows…

英語教育科

境 野 直 樹

着任早々、インターネットの大学への導入にあたり学部の仕様策定委員を拝命したこともあり、わたしの岩手大学での日々はネット環境の敷設とともに始まりました。当時、大学は市外通話でさえ交換手を経由する必要がありましたから、時差のある海外との研究者との通信手段の確保はわたしにとって死活問題でした。他学部にさきがけて学部各科、各種委員会などのメーリングリストを運用するためのサーバを、文字通り廃物利用の機材で立ち上げる作業は痛快感の反面、運用開始後の責任の重さに胃が痛くなることも。当初数年の心算だったはずの単身赴任期間に少しでもリモート業務を可能にと、じつはひたすら自分にとっての利便性を追求してのことでした。

1995年文科省の海外先端動向研究で渡英の機会を得ました。マルクスも使ったという旧大英図書館（大英博物館内）で、カードを手で検索し、半日待つてようやく配本される古色蒼然としたシステムの中で、存在だけは知っていた16、7世紀の一次資料を現物で読み耽り、昼休みには博物館の展示をじっくりと鑑賞、夜は観劇（すみません、英国演劇が専門なのでこれも仕事でした。もちろん身銭切って観ましたよ、念のため）、休日は美術館などを巡るという天国のような日々でした。帰朝して同僚に驚かれるまで、一気に白髪になっていたことに気づかなかったほど夢中でした。これがほんとの浦島効果、でしょうか。

2004年、幸運にも海外先端動向研究の機会がもう一度与えられました。大英図書館は現在のユーストンに移転していて、利便性は大幅に向上し、多くの古い版本が電子データでパソコンから閲覧できるようになっていたことに、たいへんな時代がきたと直感しました。文学・文化研究は当時「新歴史主義」や「文化唯物論」といった、誰も注目していなかった周縁的で一見無関係と思われるような複数のテキストに、それまでの研

究史が見落としてきたような共振・共鳴の可能性を読み解くという手法が幅をきかせており、一次資料へのアクセスが死活的な課題となりつつあったのです。それが急速に電子データ化されている—今後、一次資料へのアクセスはアドバンテージなどではなく、研究の基本的要件となる—そう感じました。渡英中にただちにプロジェクトの関係者とコンタクトを取り、それが商品化されて学術研究機関にライセンス形式で販売されたと知り、大いに浮き足立ったものの、価格を聞いて打ちのめされました。絶望的に高額なのです。聞けば英国でもいくつかの大学がコンソーシアムを結成してやっと導入しているとか。やがて東京大学をはじめ、ごく少数の先端のまたは潤沢な資金力のある大手私学がぼつりぼつりと導入したとの噂にまじって、国立情報学研究所のJUSTICE コンソーシアム傘下ならば格安導入可能と聞き、科研費をつぎ込んでついに岩手大学へのサイトライセンス導入にこぎつけることができました。（このあたりでは岩手大学だけなんですよ。）本学で利用できるのは、膨大なコレクションのうちのEarly English Books Onlineという1473年から1700年に英語で記述・刊行された印刷物およそ13万点です。これにより、本学で近世英語文化・文学を研究する最低限の環境は、後任にそして大学に遺すことができた。と安堵しているところですが、おそらくはそれすらも急激な学術の情報化によって程なく陳腐化するのかなとも思えてきます。圧倒的な一次文献資料へのアクセスを求めてロンドンに迷い、盛岡にとりあえずの環境を見出し／築いた30年でした。2023年に訪れたい街世界一位と二位。ともに川の流れる街にわたしの時もまた流れてゆく—そんな感慨に耽っております。



変わる学校教育 改革を後輩に託す

教育学研究科

立花正男

1981（昭和56）年3月に岩手大学教育学部中学校教員養成課程数学科を卒業し、その年の4月に岩手県の中学校の教員となりました。初任校を含め3校の中学校で勤務し、指導主事、文部科学省の教科調査官等いろいろな仕事を27年経験しました。そして、2008（平成20）年4月に岩手大学の教員として赴任し、16年経ちました。2024（令和6）年3月に43年という長い教員生活を終え、定年退職することになりました。

私が43年前に、岩手大学を卒業して、中学校の先生になったときに、私の祖母から「おまえも先生様になったのか」と感慨深めに言われたのを思い出します。祖母は明治生まれの人であり、学校の先生に対する尊敬心が強く、先生に様をつけて呼んでいました。孫がその先生になったことが本当に嬉しかったのだと思います。昭和の時代は、社会全体にも学校の先生に対する尊敬心がまだ残っており、学校教育を支えようという雰囲気がありました。しかし、現在は、先生の権威が相対的に下がるなど、学校に対する社会の評価が大きく変化しています。さらに、学校が多忙な職場であるなどという負のイメージが定着し、学校の先生に若い人が魅力を感じなくなっていることに非常に危機感をもっています。

学校教育を取り巻く世の中の変化は先生に対する評価以外でも激しいものがありました。それは、社会が工業化社会から脱工業化社会、ポスト産業化社会に向けて大きく変わろうとしていることです。AI技術が急速に発展しています。このような社会の変化に対応して、これからの学校教育は、新たな時代に即した教育内容を考え、教育改革をする必要があります。我々教師は、「不易と流行」を踏まえた上で、社会情勢をきちんと分析しながら今の学校でどのような指導が必要なのか、何が求められているのかを常に意識していかなければなりません。現状維持は衰退であるという

考え方をもち、果敢に課題に取り組むことが必要です。

しかし、組織はトップダウンでも変えることができますが、人間の意識は簡単には変えられないことも事実です。先生方の意識を変えることは非常に難しいことです。それは、学校というところがとかく保守的であるからです。私たちは決まったやり方に慣れすぎてしまうと、どうしてもそのやり方に固執してしまい、現状を変更しようとしなないことがあります。

歴史を振り返ると日本の学校教育が大きく変化するときは、自らの必要性からではなく、外圧によって変わるということがありました。第二次世界大戦後の日本の教育改革がその典型ですが、この数年はそれと匹敵するような外圧がありました。それは、新型コロナの流行です。コロナ禍という外圧によって、学校教育が大きく変化しました。また、変化せざるをえない状況でした。コロナ禍で学校教育を変えようと必死に働いている先生方を目の当たりにしました。そして、必死に活動している先生方を見て、これからの学校教育がよい方向に変わるだろうと確信したものでした。この動きが教育界全体のものになることを願っています。これからも自分の指導方法を振り返り、新しい指導方法をつくるという気概を持って、子どもたちの未来に向かって教育をして欲しいと思います。先生方が意欲的に楽しく仕事を行い、教師という職業が魅力的であることを若い人に伝えて欲しいと思います。

この思いを後輩である現場の先生方に託したいと思います。現場の先生方にエールを送り、退官の挨拶とします。



教育学部同窓会「北桐会」 創立70周年記念事業について

記念事業実行委員長（同窓会会長）

藁谷 収

「北桐会」は令和5年度に創立70周年の節目を迎えました。新型コロナウイルスの感染状況や国の意向を踏まえ、標記事業について、令和6年度に開催することを検討しました。その上で、実行委員会を設置し、その具体的な事業内容の検討を進めてきました。そこで、この度の会報第63号発送の機会を活用し、会員の皆様に下記の通り創立70周年記念事業の概要をお知らせ致します。

つきましては、記念式典・記念祝賀会に参加希望される方は、本会報に同封のハガキ「創立70周年記念事業申込書」に必要事項を記入の上、63円切手を貼って、5月31日(金)までに同窓会事務局までご返送下さい。E-mailで回答した方は下記5のメールアドレスをご活用下さい。

なお、記念祝賀会に参加希望の方には、会費を前納して頂くために「口座払込取扱票」を後日改めて送付させていただきます。

記

1. 基本方針

60周年記念事業では「北桐会」創立50周年記念事業の後の10年間の歩みをまとめた。このことを踏まえ、70周年記念事業はその後の10年間の振り返り、「北桐会」の更なる発展のための礎にすることを基本方針とする。

2. 記念事業の内容

①シンポジウム ②記念式典 ③記念祝賀会 ④記念誌発行

3. 記念式典・記念祝賀会について

① 期 日 令和6年7月6日(土)

② 会 場 □記念式典及び祝賀会

ホテルメトロポリタン盛岡 本館 14:00~18:00(予定)

盛岡市盛岡駅前通1-44 (電話) 019-625-1211

4. 会 費 記念祝賀会出席者のみ1人 10,000円(口座払込取扱票で後日前納)

5. メールアドレス E-mail: hokutou@iwate-u.ac.jp

[会務報告]

長く続いたコロナ禍は、五類へ移行し、社会生活が少しずつ戻りつつあります。北桐会理事会などは、メールや対面で進めることができました。

70周年記念式典の開催に向けて、実行委員会が準備を進めております。

以下、今年度6月からの主な活動について時系列で報告いたします。

令和5年

6月2日 第1回理事会を開催(書面)

7月6日 第64回評議員会を開催(対面)

7月 第1回常任理事会を開催(メール)

9月 新事務職員、新山美恵子さんが着任

11月 第2回常任理事会を開催(メール)

11月30日 第2回理事会を開催(対面)

[連絡とお願い]

○会員の住所変更・改姓等の際には、同封の葉書を利用して事務局へご連絡ください。

○新たに支部設立を希望する地域がございましたら、本部までお問い合わせください。

○発行協力費がたくさん寄せられています。ご協力いただきました会員の皆さまに厚く感謝を申し上げますとともに、引き続きご協力の程お願いいたします。

○岩手大学同窓会連合会報も同封いたしますので、ご覧ください。

○岩手大学教育学部教員養成基金への寄附のお願いについて同封しました。ご支援をお願いいたします。

○同窓会活動へのご意見ご提案をお待ちしています。

○新しい事務職員として、新山美恵子さんが着任しました。皆さま、よろしくお願いいたします。

編集後記

新型コロナウイルス感染症がひと段落し、社会も落ち着きを取り戻してきました。伴って、学校での学びも従来の内容や活動を再構築しながら実施されてきております。コロナ禍において実現できなかったことに、「実体験を通した学び」があります。例えば、「実際に見学へ行く」「人と関わる」など、以前は当たり前のように行われてきたことができなくなり、「ひと・もの・こと」との関わりの希薄化が懸念されています。そのため、五感を働かせ、目の前に広がるリアルと向き合うことでしか学べない直接体験を通した学びの価値が再認識されています。学校現場では、生活科や総合的な学習がその中心となると思います。

生活科と総合的な学習との連続性を考えると、キーワードとなるのが「探究的な学び」です。生活科で、体験を通して試行錯誤しながら得た学び方や、成功体験を通して高めた自己肯定感や意欲を総合的な学習の基盤としながら、深い学びの実現を目指します。総合的な学習においては、教科等横断的な学習や探究的な学習に取り組むことが推奨されており、変化の激しい社会において、自ら課題を見つけ、探究し、自分なりの考え創造をしていこうとする資質・能力を高めることにつながります。

このように、社会の変化とともに改めてよさが見つめられている生活科・総合的な学習について、新たな価値を見直すとともに、流行をとらえた学びの在り方について、広く皆さんと共有していきたいと考え、本号のテーマを設定しました。編集長の思いを感じながら改めてご一読いただければ幸いです。

結びとなりますが、「北桐」63号が完成し、会員の皆様にお届けすることができます。お忙しい中、快くご執筆・ご協力いただいた方々に、誌上より厚く御礼申し上げます。北桐は今後も、皆様のご協力を支えに、誌面の充実に尽くして参ります。なお、会員の皆様にご協力いただいた発行・発送協力費は、発経費の一部に充当させていただいております。引き続き、ご理解とご協力をお願いいたします。会員の皆様のますますのご健康とご活躍を、編集委員一同お祈りし、編集後記といたします。(J)

北 桐 第63号

令和6年3月5日発行

発 行 岩手大学教育学部同窓会「北桐会」
会長 藁谷 収
〒020-8550 盛岡市上田三丁目18-33
TEL 019-621-6618
<http://www.edu.iwate-u.ac.jp/hokutou/>
hokutou@iwate-u.ac.jp

編 集 北桐編集委員会
委員長 菅原 純也

印 刷 杜陵高速印刷株式会社
〒020-0811 盛岡市川目町23番2号
TEL 019-651-2110
FAX 019-654-1084

